

平成28年5月15日

『宗教と宗教学のあいだ—新しい共同体への展望』出版記念シンポジウム
「宗教の力と新しい絆」報告書

貴財団より助成を頂いて行った研究プロジェクトの成果として、平成27年9月に上智大学出版より『宗教と宗教学のあいだ—新しい共同体への展望』が刊行されました。それに伴って、出版記念シンポジウム「宗教の力と新しい絆」を立案、計画し、去る平成27年10月25日に下記の通り開催し、無事終了することができましたのでご報告申し上げます。

すべてに渡りご支援を賜りました貴財団に関係者一同謹んで御礼申し上げます。

記

1. 会議名 シンポジウム「宗教の力と新しい絆」
2. 日時 2015年10月25日（日）午後1時～5時30分
3. 会場 上智大学2号館508号室

4. シンポジウムの背景

近年、日本では一般的に「宗教」について否定的批判的な意見も少なくなく、社会における宗教の役割についても期待される声はあまり多くない。さらには「宗教」概念自体が西洋的なものであるとして、「宗教」の普遍性を前提とする宗教学の意義を疑問視する声も出てきている。このような「宗教」「宗教学」不要論と向き合う形で、平成18年より貴財団の助成のもと、故・荒木美智雄を中心に研究プロジェクト「現代世界の危機と新しい民衆宗教—グローバル化のもたらす苦悩と宗教的人間」を立ち上げた。そして、グローバル化がもたらした人間存在の危機的状況に直面している現代において、宗教は、いかに創造的で、クリティカルかつ救済的な世界の方向付けを提供しうるか、また、このような「宗教」理解を通じて、宗教学は、近代の問題について考える「ニュー・ヒューマニズム」の役割をいかに担うべきかを検討してきた。

途中、荒木の他界により一時、研究プロジェクトの存続が危ぶまれたが、リチャード・ガードナーを中心にして体制を立て直し、平成21年7月、上智大学において国際シンポジウム「世界の危機における宗教と宗教学の役割」を開催した。その後、この国際シンポジウムでの発表内容をベースにした出版物を計画し、学術的に貢献度が高く価値がある内容であるとともに、一般読者にも理解してもらえようような平易でわかり易い文体と構成を目指して十分構想を練り、入念な編集作業を行った。その結果、会議での発表原稿をはじめ、会議に参加できなかった執筆者たちによる書き下ろしの原稿も含めて、フィールドやバックグラウンドの異なる研究者たちが、具体的な事例をふんだんに挙げつつ、現代社会

が直面する諸問題に、宗教がどう向き合い、また、宗教学がそれをどのように伝えようとしているかを検証する『宗教と宗教学のあいだ—新しい共同体への展望』が平成27年9月に刊行された。そして、この出版物のさらなる周知を図るため、刊行記念シンポジウムを企画し、同年10月に開催する運びとなった。

5. シンポジウムの趣旨および概要

『宗教と宗教学のあいだ』は研究者による学術書ではあるが、ひろく宗教あるいは宗教的なものに興味のある読者にもアピールすることを目指して編集された。よって本シンポジウムも、専門家以外の参加者にも興味をもってもらえるよう、宗教あるいは宗教的なものが、どのようにして人々の間に新たな絆を構築し、共同体を形成してきたかという問いを中心にすえて開催されることとなった。

まず第一部では、研究プロジェクトや本書の編纂に関わりのあった研究者たちが、宗教に共同体形成の可能性をみいだす本書の方向性とそのような研究に携わる研究者のあり方について、自らの研究課題と結びつけながら評論した。木村氏の発表は、本書の理論的核となっているチャールズ・ロングの宗教学について、エリアーデから連なるシカゴ学派宗教学の伝統のなかでの位置づけが中心となった。続いて平良氏も、チャールズ・ロングのモデルを例に挙げつつ、宗教学者が単に客観的中立的なアプローチをとるのではなく、それぞれの立場性を重視した視点から、社会に向けて規範的なメッセージを発しうる可能性について論じた。次に政治学者である安野氏は、自身のナショナリズム研究の立場からみたシカゴ学派宗教学の印象を述べつつ、宗教が持つ、ナショナリズムとは異なった共同体志向について注目した。さらに、宗教による自由主義抑制への期待について語ったのは、特に印象的であった。このような発言に対してコメンテーターの西村氏と谷口氏は、それぞれの専門分野の視点を披露しながら、宗教学者の立場性の問題、そして宗教の公共性の問題について、概ね肯定的な視点から質疑を行った。

第二部では、宗教や宗教的なものを媒体として新たな共同体が形成されていく具体例として、アジア学院、カソリック共同体、ラビリンスウォークについての発表が行われた。アジア学院の理事長を長く務めた大津氏は、その歴史を振り返りつつ、異なる信仰を持つもの同士が、農作業や共同生活のような身体を動かす体験を共有することで宗教の違いを乗り越えた共同体を作り得るという自身の信念を語った。宗教学者であり、またカソリック神父でもあるロボアム氏は、カソリックの霊操を紹介し、この瞑想法を通して、それぞれが持っている既成概念を打ち壊すことで新たな共同体が生まれるプロセスを提示した。そして、こちらも一種の瞑想法であるラビリンスウォークの実践者である武田氏は、その経験がもたらす共感の重要性を強調しつつ、アジア学院も含め、日本各地でこのようなユニークな形で共同体が創られていることについてスライドを用いて紹介した。このような異なった伝統やアプローチを用いた築かれた共同体の事例について、コメンテーターの山中氏と葛西氏は、その可能性を十分に認めつつ、しかし宗教社会学者の立場から敢えて一歩踏み込んだクリティカルな問いを発表者たちに投げかけた。第一部が宗教と宗教学が協

働ける可能性を強く印象づけたのに対し、第二部は、それらの間に一線を画して客観性を担保する重要性が確認される場となった。

シンポジウム当日は、日曜日であったにも関わらず、最終的には、60名近い参加者が来場し、熱心に発表およびコメントに聴きいていた。シンポジウム開催の間は、会場の外で、出版社によって本書を含む関連の刊行物の販売も行われた。シンポジウム後、スクワール麴町で開かれたレセプションには20名ほどが来場し、情報交換や意見交換を行った。

6. スケジュールおよび発表者/コメンテーター

- 13:00 ~13:10 あいさつ：リチャード・ガードナー（上智大学）
- 13:10~15:15 第一部「宗教と宗教学のあいだーチャールズ・ロングの宗教学」
司会： 村上辰雄（上智大学）
発表者： 木村武史（筑波大学）
平良直（八洲学園大学）
安野正士（上智大学）
コメンテーター：西村明（東京大学）
谷口智子（愛知県立大学）
- 15:15 ~15:30 休憩
- 15:30 ~17:30 第二部「宗教の力と新しい絆」
司会： 島菌進（上智大学）
発表者： 大津健一（アジア学院）
ティエリ・ロボアム（上智大学）
武田光世（ラビリンスウォーク・ジャパン）
コメンテーター：山中弘（筑波大学）
葛西賢太（宗教情報センター）
- 18:00~20:00 レセプション（於：スクワール麴町）

以上

シンポジウム「宗教の力と新しい絆」実行委員会